

北日本における先史農耕化の学術的研究



写真 1
津軽平野における発掘



写真 2
田舎館村垂柳遺跡
復元水田における
イネ収穫実験



写真 3
土器付着物の分析

今後の展望

これまでの土器や石器といった目に見えやすいモノだけでなくマイクロレベルを対象にした研究が進むことによって、日本史上における農耕化の議論に新しい学説を唱えることができます。こうした点は地域が知ることができなかった文化資源に新たな価値を吹き込みます。展示や特産商品開発など、地域の観光や魅力向上への寄与が期待されます。

なぜ、縄文人は北日本の大地で稲作を始めたのか、その謎に迫る。

上條 信彦

Kamijo Nobuhiko

弘前大学人文社会科学部 教授

北日本には、本州最北端の弥生時代前半の水田遺跡である砂沢遺跡や垂柳遺跡など、水稻農耕文化が弥生時代の早い段階で定着したことを示す遺跡が発見されています。この点は、南方で栽培化が始まったイネが紀元前 300 年頃には、北緯 40 度を越えた地域で拡大していたことを示しており、農耕文化の展開を知るうえで世界史上でも注目されます。

そこで、なぜこの地で水稻が始まったのかの謎を探るため、考古学のほか、地理学、土壌学、植物学、分子生物学といった学際的な調査を進めています。遺跡発掘イネの形質測定と DNA 分析から品種を推定したり、花粉やプラント・オパール、同位体比分析によって栽培環境を検討したりしています。また、各市町村との共同研究のもと精密ドローンによる測量や発掘調査を行い微地形や土壌を解析し、水稻農耕の利用期間・生産量を明らかにしつつあります。こうした水稻農耕文化に至る変化プロセスの解明に取り組んでいます。